

卑弥呼と東アジア情勢

国立歴史民俗博物館 仁藤敦史

1

1 なくのくに わじん
奴国成立以前の倭人社会と外交

「倭国乱」が卑弥呼の「共立」により收拾された2世紀末以前の状況は、中国側の史料によっても、断片的にしか伝わっていない。そのうちの一つである1世紀後半に成立した中国前漢の正史『漢書』地理志には、「それ楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国と為る、歳時を以て来たりて獻見すと云う」とある。これは、紀元前1世紀ころの倭人社会が中国王朝から「国」と認識された百余りの集落連合から構成され、その中には定期的に朝鮮半島の楽浪郡に朝貢していた国も存在したことを示しているが、この段階の「百余国」とは、おそらくは北部九州を中心とした地域であったと想像される。したがって1世紀後半以前の小国分立段階から中国王朝とは朝貢関係を有していたのだが、この段階では「倭人」という人種的表記のみが用いられており、「倭国」というまとまりや国々を束ねる「倭王」の存在はまだ見られない。

2

2 奴国の出現と後漢王朝とのかかわり

一方、『後漢書』は『三国志』よりも後の5世紀に成立し、多くの記述は『三国志』の要約的記述にすぎないが、『三国志』には見えない独自の記述もある。すなわち、建武中元(57)年のこととして「倭の奴国、貢ぎを奉げて朝賀す。使人は自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武は賜うに印綬を以てす」という記載

がある。このうち大夫と極南界についての記載は、『魏志』倭人伝にみえる「古自り以来、其の使いの中国に詣るときは、皆、自ら大夫と称す」「次に奴国有り、此れ女王の境界の尽くる所なり。其の南には狗奴国有り」という文章を下敷きにしているが、建武中元2(57)年、奴国が後漢王朝に冊封され、印綬を与えられたとある部分は『後漢書』のオリジナルの記載である。この時に与えられた印は、天明4(1784)年に福岡県志賀島で発見された「漢／委奴／国王」と彫られた金印(国宝、福岡市博物館蔵)に比定されている。

奴国は、『魏志』倭人伝によると「二万余戸」という卓越した人口を有したとあり、後に「隴県」(『日本書紀』仲哀8年正月己亥条)や「那津」(同宣化元年5月辛丑条)とみられる地で、須玖岡本遺跡(福岡県春日市岡本)を中心とした福岡平野一帯に比定されている。首長墓からは漢代の中国銅鏡など卓越した副葬品が出土し、奴国の王墓に比定されている。また、周辺からは青銅器・鉄器・ガラス製品が生産された大規模な工房群が発見されている。金印の「漢委奴国王」の称号などからすれば、当時の倭国が後漢王朝の支配秩序(天下)に包摂されていたことは明らかであるが、「倭の奴国」の称号からすれば、いまだ倭国全体を統率すべき王号とはなっていない点は重要である。ちなみに、『漢書』王莽伝には、元始5(5)



三国時代の東アジア

年のこととして「東夷の王、大海を渡りて、国珍を奉ず」とある。不明確な記載だが、仮にこの大海を渡って珍宝をたてまつった「東夷王」が、絶域の倭国からの使者とすれば、すでに前漢末期から北部九州と中国との交渉を想定することができる。

さらに『後漢書』倭伝には、安帝の永初元(107)年のこととして「倭国王の帥升等、生口百六十人を献じ、願いて見えんことを請う」とある。また『魏志』倭人伝には、卑弥呼以前の倭国について「其の国、本亦男子を以て王と為す。住まること七、八十年、倭国乱れて、相攻伐すること年を歴たり」と記載されている。倭国乱の年代について、『後漢書』倭伝は「桓靈の間」(146～189年)、『梁書』倭伝は「漢靈帝の光和中」(178～184年)としており、倭国乱を遡ること七、八十年前の男子を倭国王とした段階は、永初元(107)年の「倭国王帥升」による朝貢を起点としている。少なくとも中国側の意識として、「倭国」および「倭国王」成立の起点としてこの記事は位置付けられている。ここで倭国王が「帥升等」と複数形になっていることが注目され、帥升は単独で中国に朝貢したのではなく、形式的にせよ倭人社会を代表し、有力な国々を束ねる形で王として君臨していたと考えられる。

3 倭国の乱と女王卑弥呼の誕生

2世紀初めまでには、まず北九州において奴国から伊都国への主導権の移動があり、さらに2世紀後半には「倭国乱」と呼ばれる騒乱により、伊都国から邪馬台国への主導権の移動があったと想

定される。倭国が長い間乱れて戦乱状態にあったが、卑弥呼を倭国の女王として「共立」することによって、「平和」がもたらされたことになる。

これを裏付ける史料とされるのが、奈良県天理市の東大寺山古墳出土の鉄刀銘である。この古墳からは、「中平」(184～189年)という後漢年号を記した鉄剣が出土した。中平年号とは、「倭国乱」があったとされる中国の桓帝と靈帝の間(146～189年)の年号で、「光和年中」(178～184年)の直後の年号である。邪馬台国がどこかという議論はさておくとしても、倭国の乱が治まった直後の中平年間に造られた鉄剣が、中国あるいは遼東半島を支配していた公孫氏を経由し、倭国へもたらされたことになる。したがって、「共立」されたばかりの卑弥呼が朝貢して、中国からその地位を承認する意味で剣が与えられたと考えられる。ただし、共立されたばかりの卑弥呼に、後漢から直接与えられたと考えるか、あるいは当時遼東半島を支配していた公孫氏をいったん経由してもたらされたと考えるかは、時期的に微妙で、判断が難しい。

4 卑弥呼と公孫氏との交渉

公孫氏は後漢末から三国時代に中国東北部で勢力をもった豪族で、卑弥呼が魏へ朝貢する直前の景初2(238)年に滅ぼされているが、後漢末の3世紀初頭に、公孫氏は楽浪郡の南部を分けて帯方郡を設置している。『魏志』韓伝には「建安中、公孫康、屯有県以南の荒地を分かちて帯方郡と為し、公孫模・張敞を遣わして、遺民を収集せしめ、兵を興して韓・濊を伐つ。旧民稍出ず。是の後、倭・韓は遂に帯方に属す」とある。つまり、後漢献帝の建安年間(196～220)に公孫康は、楽浪郡の屯有県より南の荒地を派兵により平定、旧楽浪郡民を奪還し、帯方郡を置いたのである。帯方郡分置の正確な年代は明らかではないが、父の公孫度が建安9(204)年に没しているため、少なくともそれ以降と考えられる。

注目されるのは、立郡以降に倭と韓が帯方郡に所属したと記載されている点である。この記載を卑弥呼によるはじめての遣使と解釈すれば、公孫氏との関係で「中平」鉄刀を与えられた可能性が高いが、単に楽浪郡から帯方郡への所属替えを示

すものと解釈し、後漢王朝への倭国王の朝貢は帥升以来連続していたとすれば後漢王朝末期に直接卑弥呼に与えられた可能性が高くなる。しかし、すでに倭国の中国交渉の窓口であった楽浪郡は、2世紀末には高句麗の侵入などもあり衰退し、中国本土も中平元（184）年の黄巾の乱以来、後漢滅亡まで混乱が続いていたので、中平年間に卑弥呼の使者が後漢へ直接朝貢することは容易でなかったことが想定される。一方、2世紀末の段階で倭国乱が卑弥呼の「共立」により收拾されているとすれば、中国正史に記載は欠いているが、卑弥呼と公孫氏が帯方郡を介して交渉していた可能性は高いと考えられる。漢鏡の倭国への流入量が倭国乱の時期に一時的に減少し、帯方郡の成立以後再び増加する傾向を示すという指摘も、公孫氏との交渉を裏付けている。

4

公孫氏の滅亡とその後の外交

従来、景初3（238）年における魏と卑弥呼との交渉は、公孫氏滅亡直後であることから、そのタイムリーな遣使が外交における開明性として評価されてきた傾向がある。しかし、むしろそれ以前における公孫氏との交渉を前提に考えるならば、卑弥呼にとっては公孫氏にかわる新たな後ろ盾を早急に必要としたという、国内事情によるものと位置付けることができる。つまり、卑弥呼の「共立」により保たれた「平和」は、外国の権威と支持により保たれていた極めて危うい秩序であったことになる。

以上のように「中平」年号の鉄剣に注目するならば、魏への朝貢以前に、公孫氏と女王卑弥呼との交渉がすでに存在していた可能性は高い。卑弥呼は帯方郡を介して、公孫氏とどのような政治的関係を維持していたのか。問題は、魏や呉に対する公孫氏の政治的立場が時期により微妙なことである。すなわち、公孫氏は独立的な地位を占めながら、魏王朝から「遼東太守」に任命されるなど、太和4（230）年頃までは良好な関係を維持していた。その一方で、呉ともしばしば交渉し、とりわけ嘉禾2（233）年頃には呉の孫権から公孫淵は「燕王」に冊封され、多大な「金宝珍貨」が送られている。それについて魏側の史料では、公孫氏が逆賊孫権の甘言により交通し貿易していることを非難している。さらに、滅亡直前にも呉王朝に臣従して派兵を願っており、呉の北方派兵も実際に行われている。

こうした魏と呉の対立の最中に、倭国は帯方郡へ遣使し、公孫氏からその地位を承認されていたことになる。したがって、倭国は公孫氏との良好な関係を維持し、「中平」年刀や画文帯神獸鏡に代表される先進文物の導入を安定させるために、一時的にせよ呉王朝との間接的な関係を有した可能性も考えられる。卑弥呼の政治的立場を考える場合には、こうした公孫氏をめぐる複雑な東アジア情勢を考慮する必要がある。

この剣は、卑弥呼が中国から地位を認めてもらうためのしるしだったのね。

